

Press Release

2017年3月発信

報道関係者各位

軽井沢現代美術館2017年の展示企画をお知らせいたします。詳しくは広報担当までお問い合わせくださいませ。

1F 常設展示室 4月27日(木)～11月23日(木)

海を渡った画家たち — コレクションの軌跡 —

【概要】

軽井沢現代美術館は、今年開館10年目を迎えます。

本展では「海を渡った画家たち」をコンセプトに収集された当館のコレクションの系譜を、作品とともに展望いたします。当館の創設者・谷川憲正(東京・海画廊創業者)は、長きに渡りオープンスペースをイメージモデルとした美術館構想を掲げ、作品の収集を続けてまいりました。そして2008年夏、その夢は実現したのです。

テーマは、日本を離れ、諸外国を制作の拠点としたアーティスト。それも短期間の洋行ではなく、生まれ育った母国に戻らない覚悟で片道切符を握り締め、異国の地で美術運動に心血を注ぎ、一生を捧げた者たちです。

20世紀初頭に渡仏し、エコール・ド・パリの寵児となった藤田嗣治は、その後続くあまたの画家の嚆矢となりました。当時保守的だった日本の美術界に異論を呈し、パリ、ニューヨークを中心に次々と台頭する新しい様式を追い求め、あえて棘の道を進んだ日本人たち。彼らは向かった制作の地で互いに交流し、刺激を受け合い、自らのナショナリティーやマイノリティーを反芻しながら歴史に名を刻んでいきました。

フランスへ渡った田淵安一、佐藤敬、鬼頭暉、今井俊満、堂本尚郎。アメリカにアトリエを構えたイサムノグチ、猪熊弦一郎。彼らの功績は日本国内においても、第二次大戦後にヨーロッパで旋風を巻き起こした前衛芸術運動「アンフォルメル」の日本における一例として評価された「具体美術協会」や、同時期の大きな動向として知られる「もの派」の作家たちへと続く重要な布石となりました。現在も各国でその名を轟かせる草間彌生、奈良美智、村上隆も、日本国内に留まることなく常に「世界」と闘う革新者として、たすきを繋いでいると言えるでしょう。

もがき苦しみなながらも芸術への情熱を忘れることのなかった「海を渡った画家たち」の鋭気漲る70余点の作品を、どうぞご高覧くださいませ。

●出展作家

齋嘔、イサムノグチ、猪熊弦一郎、今井俊満、草間彌生、佐藤敬、白髪一雄、関根伸夫、田淵安一、堂本尚郎、奈良美智、藤田嗣治、松谷武判、村上隆、ロッカクアヤコ(五十音順) 他



(c) Hisao Domoto 「1959-12」
1959年 キャンバスに油彩 145.5×112cm
堂本尚郎



(c) Takesada Matsutani 「CIRCLE」
2004年 キャンバスにボンドによるレリーフ 92×73.5cm
松谷武判



(c) Ayako Rokkaku 「無題」
2006年 キャンバスに油彩 256×164cm
ロッカクアヤコ

2F 企画展示室 4月27日(木)～11月23日(木)

菅井汲 – 疾走するイメージ –

【概要】

「ここで車をやめたら負けやと思うんです。ですから、前のよりももっと速いやつを買うたんです。」

1967年の夏、愛車ポルシェでハイウェイを走行中に大事故を起こし、九死に一生を得たわずか翌年に菅井汲が残した言葉です。食事は生きるために必要なことに過ぎないから、と三食決まったものしか口にしなかったという徹底して無駄をそぎ落とす生活ぶりも、親交のあった多くの人物たちによる驚きに満ちたエピソードのひとつとして幾度となく語られています。

日本とフランスを活動の拠点とし、生前から国際的に高い評価を受けた画家・菅井汲。作品は没後20年以上経った今もなお、色褪せない精彩を放ち私たちを魅了しています。

60年近くに及ぶ画業の中で、その作風は何度も大きな変貌を遂げました。初期の精緻な筆致で描かれた東洋的なモチーフは、1950年代後半になると次第にヴォリュームのあるシンプルなフォルムへと移り変わっていきます。

1962年以降に展開された「オートルート」シリーズに見られる幾何形体は、時代とともに色彩やマチエール、造形要素の規格化が進み、道路標識を思わせるフラットで記号性を帯びたスタイルが誕生しました。そして1980年代、限られた色彩と筆触を用いた構成により、それまで無機質だった画面に再び絵画性が与えられるようになります。本展では、生涯探求を続けた様式の一部をご紹介します。

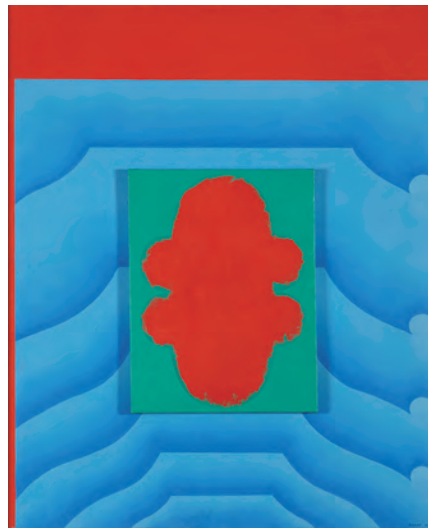
冒頭の一節、「車」ということばを「絵」に置き換えてみるとどうでしょう。スピードをこよなく愛した菅井汲は、創作においても絶えずとどまることを知らず、前だけを見て走り続けました。同じモチーフを反復し組み合わせること、余計なものを捨て去った単純明快なイメージ。画家は、生きること、描くこと、走ること、すべてにおいて「菅井汲」でありたいと願い、全うしたように思えてなりません。

このたび展示いたします1940年代から1980年代までの作品20余点を通して、眼前を過ぎ去った疾走の残響をご体感いただけましたら幸いです。

●出展作家 菅井汲



(c) Kumi Sugai 「ムッシュ」
1986年頃 キャンバスに油彩 124×93cm
菅井汲



(c) Kumi Sugai 「LE POISSON」
1965年 キャンバスに油彩 99.5×80.5cm
菅井汲

本展についてのお問い合わせ先

海画廊（軽井沢現代美術館 東京事務所）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店4F TEL/FAX 03-3233-3359

E-MAIL umigallery@hkg.odn.ne.jp (担当：稲村・丸山)